

少年時代

陶易王



少年はお寺のほうから聞こえた祭り太鼓の音に、そわそわと落ち着かないう気分だった。

お寺の境内でサークスが開かれるとも聞いた。「麗しき天然」の曲が流れて来る。

机に向かつて英文翻訳の仕事をしてこの中の空を横田に見ながら、連れてついてくるとこなど思つてこない近づくのお邸でお手伝いさんをしてくる瑞枝ちゃんが、本を広げて来た。サークスの話をすると

「いいわ、私、今晚暇だから、坊ちゃんをお祭りに連れていってあげよいか」と言ひや

母はあまり歓迎しない顔だったが、弓削田ばかりお金を出して瑞枝ちゃんに渡し「済みません、お願ひします。私は一寸仕事が終わらないので」と笑顔で頼んだ。

少年は天にも昇る気持ひがして、瑞枝ちゃんと手をつないで、お寺の境内に向かつた。

そこにはもう縁日の屋台がずらりと並びセルロイードの前面や、玩具、棒餡などを売つていた。その前を素通りしてサークスのテントに入れる。中は熱氣風でむんむんとしている。

狭い板の座席に座って見ていると ライオンの火の輪くぐりや、熊の玉乗りなど それ程珍しくなかつたが空中フランコや、アクロバットには興をのんだ。

少年は好奇心の塊である。20歳の若し瑞枝ちゃんに、次々と質問を浴びせかただ。

「ねえ あの子の身体はどうなつてこるの? どうして背骨があんなに曲がるの?」

彼女は周囲を見回し、少年の耳に唇をつけて小ちな声で 慎らしげに事を語じた。

「人扱いが子供をひつて毎日 骨が軟らかくなるまでお酢をコップで何杯も飲ませる。骨が軟らかくなつて自由に骨が曲がる様になつたが その子供をサーク

スに売つて アクロバットの芸を仕込む。坊ちゃんも勉強しないで遊んでばかりいると 人扱いに捕まつてサーカスに売られちゃうから」

絵本で見たピノキオがサークスに売られた話は本当だつたのか。急に懶らしくなつて瑞枝ちゃんにしがみつくと 彼女もきゅうと 抱きしめてくれた。彼女の胸は柔らかく 仄かに香水が匂つた。

夜は楽しい事が沢山あって 中々眠れなかつた。

お酢を飲むと骨が軟らかになると言つ固定観念が脳裏にしみこんで 少年は大人になつても酸っぱい物が食べられなかつた。

(一)

千葉 秋葉 琢磨

責森 朝霧 朝光

花見して 靖国神社で歌ひけり

春時雨会話途絶えし通夜の路

牡蠣食べて山島に居る平和かな

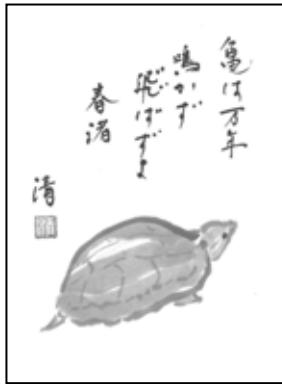
冬口和安樂島巡り 一口終ゆ

一四四八十五路の画家と話しけり

医芸俳壇



末つ子の小さき生平雑祭



東京 福富 清子

畠土のふんわりと凍て解けにけり
浜松 岩本 漂人

長野 有泉 七種

春雪の細毛よいかに解けゆけり
をさな児の歩み確かに春立てり

春風にゆだねて歩ゆむ故郷かな
白梅の香の地に沈む夜の雨
畠土のふんわりと凍て解けこけり

立ち寄れば「三四郎池」の冬籠
維鯉だけ際立つ池の薄氷
夕照の三日月太陽冬の海
埋め尽くす名園枯萎雪景色
春風改革理事会へ責一步

浜松 岩本 漂人

昭り映える水面はオシの群む
よき枝にノスリ止りぬ夕焼
オオハンやげんこつ程の黒き群
初詣イカルが招く奥の院
植込みのアオジを待てり着ふく

東京 篠田 那加
妻の忌や古都の老舗に時代離
バレンタインの謂れ識らずに卒寿越ゆ
春立ちぬ早くも縊衾準備とや
店長以下挨拶一重松の内
益梅は葬儀屋からと孫笑ふ

東京 田村 豊幸

小松川千本桜花盛り
荒川の堤を行けば春づひら
純日の木蓮の花空高く
花ズオウ紅紫に咲き誇る
梅の実の日につくよつな候とな
東京 初芝 澄雄

長野 檀本 勝彦

初劇の船井慶や数珠丸し
鉄山の像に吹書きぬ大守閣
紙細工ドームあでやか寒に成る
湯中りや欲得失せて寒眩し
びよびよと卒寿に病みて春を待つ

新潟
中村
雄彦

立ち寄れば「三四郎池」の冬籠

新年の笑顔に大きな福袋
新築の洋間に揺るる餅の花

兵庫 廣辻 逸郎

潮騒が春の息吹を運び来る

洞門をくぐつ花満つト豊

山染める寒緋桜や戦跡

順序ある四股の轍や春の風

青春のおもひ濃き人をくらべ

東京 福留 清子

雪暗の奥へ人急ぐ北の町

母校跡は城跡にしてかげりへつ

薹六を出で本意無くも車輪トア

朝に日^けに数珠子の括配覗きをり

櫻かけ袂からきよ春拾

広島 渡辺 晋山

兜頭や鹿の角落つ遊歩道

瀬戸内の河口近くに水温む

下萌やソルフェリーノの赤十字

鳥帰る影を残せし安芸路かな

略藝やヅカ劇場へ花の道

貢森 福士 盛大

春めきて柔らかな風服に入る

亡き父の墓にて淡き陽春彼岸

春の波裸足で遊ぶ子等の声

モートーン写眞の整理日永かな

公園のベンチに映える春日影

貢森 三上 忠英

よかよちの双子姉妹や書き踏む

冴え返る朽ちたるままの開墾碑

田を植えて後継ぎなきを悔つはせず

ものの芽に秘めたる力ありにけり

何一つ悔つを残さず卒業す

「俳画」の亀のモテル

福留さんから預かつた最初の俳画は

七分開き花一輪の自尊かな

の句に一枝の桜花が添えてありました。

といふが墨絵でほかしてある花ひらが

印刷ると浮き上がりません。そこ

で補筆をお願いしたのですが、難しいよ

うで今回の大にとしかえられました。

お手紙によりますと、亀君のモテルは

なんど伊藤皇秋先生作の硯です。使用す

るのがおそれ多く棚に飾つてあったので

すが、立派な甲羅に改めて「氣つきモテル」

にとせていただいたそうです。

じじょつこせふなつこもるて猫柳

東京 福神 規子

子を抱いて来し聖堂の春の冷

遠のけば山葉與の黄の鶯ひけり

塵取りの落花に滲つありにけり

しづらは瀧つてしまひ蟬蚪の水

じじょつこせふなつこもるて猫柳

東京 粉木 秀穂

春暘の書舗に待ちみし古書に逢ふ

枕上おどりおどりし春の雷

桃の花活けて古鐘鳴つける

春眠の公会堂も老いしかな

楽を聽く昔の我と春惜しむ

医芸柳壇



医芸柳壇

医芸柳壇

千葉 たれ女^め

群馬 豊泉 清

金メダル・パラリンピックがもち帰る
旦那のケンカ・コース忍ち海を越え
かまびすし菊のかーテン開けてより
米国産ウルチの米菓納得し

「国技館」の上に外の字つけたがり

貢森 朝霧 朝光

眠られぬトイレとハイキニ重責め

官製はハガキのほかに談口も

禿ても割引なしの散髪屋

將軍の頭平和の二字はなし

北の核世界の平和敵とする

東京 小南 丁字

野口さん宇宙で迎える初日の出

塾通いこつそり絵馬に願を賭け

春の句が「角川選」入り海渡る(注)

朝青龍退くやむなし惜しむ春

三兄弟世界一王者あと一本

貢森 三上 忠英

わへり咲くこれが見納めと思わねば

お書き言われよつとも生きじやる

寒じ世だ何を頼りに生きていく

返品のきかない妻に泣かされる

薔薇を保てるうちは生きて行く

東京 田村 豊幸

義理チョコのふりして毎年郵送す

浅い義理深い義理ありチョコ値段

極楽の君に併えるチョコ義理でない

本命のチョコに一人の名を刻み

鉄力ブト形のチョコは大日本

大阪 池田 白楽

温暖化親子の情は寒冷化

温暖化人の絆は乾燥化

お金こそ全て一色唯一神

アメリカは東岸金融 西二十一

待望の平成維新はどう行った

貢森 朝霧 朝光

野口さん宇宙で迎える初日の出

塾通いこつそり絵馬に願を賭け

春の句が「角川選」入り海渡る(注)

朝青龍退くやむなし惜しむ春

三兄弟世界一王者あと一本

東京 田村 豊幸

義理チョコのふりして毎年郵送す

浅い義理深い義理ありチョコ値段

極楽の君に併えるチョコ義理でない

本命のチョコに一人の名を刻み

鉄力ブト形のチョコは大日本

大阪 池田 白楽

温暖化親子の情は寒冷化

温暖化人の絆は乾燥化

お金こそ全て一色唯一神

アメリカは東岸金融 西二十一

待望の平成維新はどう行った

莫食糸金も力も無い男
外国にて儀賣し出す国技館
樂園にてんがいてトキ哀れ
老いたけど子が徒わぬ親となり
マグロとは無縫に無じ書くのかな

(注) 世界文化社が発行したカラー版
「俳句歳事記」の『夏の草木』百合に、
久保田万太郎氏、松本たかし氏と並んで
私の句
百合に吹ぐ風とは逆の雲よざる
を発見しました。しかも監修が尊敬する
中村江女氏、一重の喜びでした。